

V・スザンヌ・クリムバーグ（編）

野口昌邦（訳）

乳腺外科手術アトラス

井本 滋

杏林大学教授・医学部付属病院乳腺外科

「乳癌の外科治療の世界で、オピニオンリーダーである日本人は誰か？」

それは、Klimberg 先生編集の“Atlas of Breast Surgical Techniques”を訳された野口昌邦先生である。今回、このような書評の機会を与えられ大変光栄であると同時に、Memorial Sloan-Kettering がんセンターの Morrow 先生をはじめ、世界中に親友がおられる野口先生を羨ましく思いつつも、先生ならではの訳書と感服した次第である。

乳癌は手術、薬物、放射線を組み合わせた集学的治療の時代にある。治療の潮流は、乳癌の生物学的特性に基づいた薬物治療にある。しかし、手術が決して疎かになることはない。むしろ、多様な外科的治療法が選択される時代となり、外科系の乳腺専門医は日々修練を積み重ねなければならない。本書は、現代の乳腺外科手術を網羅的かつ系統的に解説している。しかも、第8章「アイソトープによる潜在性病変の同定」、第9章「凍

結補助下の腫瘍摘出術」、第23章「MammoSite[®]と他の短期放射線照射機器」など、日本でも今後導入が期待される領域について詳細かつ明瞭に記載されており、初学者のみならず第一線の専門家においても新鮮な情報に満ちている。

本書はビジュアル的に大変見やすくわかりやすい。イラストを多用している一方、実際の写真も過不足なく配置され、見る者を飽きさせない。一度、手に取ってどのページでも開いていただきたい。見開きの右ページにイラストや写真と短いコメントがあり、左ページに文章で手技に関するエッセンスが記載されている。さらに、所々に挿入されている「memo」は日本と海外での考え方の比較や、野口先生の経験に基づくアドバイスがちりばめられており、本文に加えてぜひ味わっていただきたい要所である。さすれば、この手術アトラスを眺めているだけで、すぐにやってみてできそうな感覚に陥ること間違いなしである。

さて、評者は不器用である。手術はとにかく難度が高く、神の手と呼ばれる高みを目指したいと願う外科医も多い。医学生時代に先輩に「内科は俊才の墓場だしとてもついていけないが、不器用でも外科医になれますか？」と聞いたところ、「標準術式は修練によってできるようになるから心配要らない」と言われて外科を志望した。そして外科医として四半世紀が経った今、乳房全摘・郭清から一変し、乳癌外科治療は根治性を担保しつつ、かつ整容性や機能性を追求する時代になった。Klimberg 先生、野口先生の序文にあるように、乳腺の外科手術ほど日進月歩の癌領域は少ないかも知れない。本書は、新しい時代にふさわしい標準的な乳腺外科手術のバイブルとして必携の書である。

●A4/頁 456/2013 年

定価 本体 18,000 円＋税

[ISBN978-4-260-01649-0]

医学書院 刊